
シルバーコード

原始人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

シルバーコード

【Zコード】

Z2954M

【作者名】

原始人

【あらすじ】

魔界で過ごす銀髪の男はある時、いきなり魔王に人間界に行つて欲しいと言われる。

なんでも最近人間界の
様子がおかしいらしい。

銀髪の男「まあ良いでしょう。退屈しき程度はできればいいのですが。」

そして運命は動き出す。

銀髪の男（前書き）

初めまして、原始人です。
小説を書くのは初めてなので拙い文章になると
思いますが、よろしくお願いします。

銀髪の男

s i d e ? ? ?

とある城の中を静かに歩く男がいた。
その男の外見は髪が銀色で肩のあたりまで伸びており、眼は燃える
ような紅い色をしていた。

そして目的の場所までつと扉を開き部屋の中央まで歩くとすぐに
片膝と拳をつき、壇上の人物を見上げた。

? ? ? 「ただいま戻りました魔王様」

魔王「相変わらず仕事が速いのねハーデス」

銀髪の男の名前は

ハーデスと呼ばれていた。

そしてハーデスが魔王と呼んだ人物は女性だったその女性は赤い髪
にハーデスと同じ燃えるような紅い眼をしていた。
身長はハーデス184ぐらいでその女性はハーデスより少し低いく
らいだったが女性にしては高い方だった。

。魔王「戻つて来て早々で悪いんだけど、貴方に
また頼みたい事があるのよ」

ハーデスは仕事をよく
頼まれる方だったが、

今回のように仕事から戻つてまたすぐに仕事というのはなかつた。

今度は何だろうかと思つてゐると、思いもしない事を言つてきた。

魔王「貴方の人間界に行つてきてほしいの」

ハーデスは思つた何故

今更人間界などにいかなければならぬのかと。まあ、魔王様の頼み事は私は基本的には断らないので頼み易い私に頼んだ可能性もあるが・・・

魔王「最近、人間界の様子が少しおかしいらしいの。それでハーデス、

貴方の人間界に降りて
確かめてきて欲しいのよ。」

ハーデス（人間界の様子がおかしい？　ここ最近は、それなりに平和だったと聞くが・・・）

ハーデス「分かりました魔王様の頼みとあらば

今一度、人間界に降りてどうなつてているのか確かめてきましょう。」

魔王「良かつたわ、断られるかと思つたけど
行つてくれるのね。」
と笑顔で行つてきた。

ハーデス（初めてから私が断ると思つような仕事は頼まないだろに
よく言つう）

ハーデス「ええ、それではそろそろ行つて参ります。」

そつとうとハーデスは

指をパチンと鳴らす

するとハーデスの足先が影の中に徐々に入つていく。

魔王「氣をつけてなんて貴方には不要の言葉でしょ」など、向こうでは
どこに敵が潜んでいるかわからないから

油断しちゃダメよ。」

ハーデス「はい、」忠告感謝致します。ではそろそろ・・・」

その言葉を最後に

ハーデスの身体は全て

影の中に入つた。

氷の男（前書き）

更新は不定期になるかもしだせんがよろしくお願いします。

氷の男

side ???

草木が生い茂つて
いる
森の中を水色の髪を

たなびかせた一人の男性がいた。

その男性の眼は髪と同じ水色をしていた。
そして眼の前でおきている現象を不思議そうに
眺めていた。

何故ならいきなり地面に影がてきたと思ったたら、影の中から徐々
に頭と思わしきものがてきて最後には足がでた。

そう、目の前にいる人物こそ魔界から人間界に降りて来た、ハーデ
スだった。水色の髪の男は目の前の人物を見て警戒していた。
まあ、いきなりこんな現れ方をして警戒しない方がおかしいが。

相手の見た目は中性的な顔立ちなので性別の
判断がつきにくいが、

恐らく男性だろうと推測する。

何故なら着ている服は男性用だったからだ。

水色の髪の男（男装をしている女性でない限りは男のハズだしな）

そう思い取りあえず

先手とばかりに敵意を

にじませながら眼前の人物に声をかけた。

水色の髪の男「貴様

何者だ？返答によつては生かしてかえさんぞ！」

ハーデス「最近の人間どもは、礼儀が全くなつていませんね。相手の事を尋ねる前に自分の名前くらい先に言えないのですかね？」

ハーデスは相手を馬鹿にしたような表情で見下す。
身長的にはハーデスは、水色の髪の男より高いので自然と見下す形になる。

水色の髪の男は内心
かなりムカついたが、

確かに名前は言つてなかつたので名乗る事にした。

水色の髪の男「よく覚えておけ！これから貴様を葬る男の名前を！
俺の名前はシヴァだ！」

シヴァは大声で叫んだ。

シヴァ「さあ、次は貴様が名乗れ！こつちが名乗れば相手も名乗る、
これが礼儀だろう！」

ハーデス「ふむ、そうですね、それでは名乗らせて頂きましょう。
我が名はハーデス、魔界では魔王様の側近をさせて頂いております。

」

そう言いながら右手を
胸の前にもつていいき、
ななめ45度の角度で
優雅にお辞儀をした。

シヴァ（何だと、聞き間違いか今、魔王の側近とか言わなかつたか？
何故、魔王の側近がこんな所にいる。ますます
怪しい、嘘を言つてゐようにもみえないがやはり実力行使で確かめ
るしかない！）

そしてシヴァは臨戦体制に入った。

人物紹介（主人公のハーテスのみ）（前書き）

先に主人公の人物紹介だけ。

人物紹介（主人公のハーデスのみ）

ハーデス

能力 影の能力を使うが
基本的に使う技。
色々な能力を
持っている。

身長 184cm

中性的な顔立ちなので、女性に間違われやすい。ちなみにハーデス
という名前は死神の名前から
きている。

死神とは冥府の管理人であり、影の世界の事を
冥府といふ。

髪は銀色で眼は紅い色だが、眼の色は本当の色ではないらしい。
魔王には絶対の忠誠を誓っている。

余談だが、昔の知り合いが今のハーデスを見ると姿は変わっていな
くとも別人かと思うらしい。

対決（前書き）

今回は少し戦闘描写ありです。

対決

side ハーデス

ハーデス「さて、この私を葬ると誓っていましたね？まあ、そんな事が貴方にできるとは思いませんが。」

シヴァ「吐かせ！」
そう言うとシヴァは、
一瞬でハーデスまでの
距離を詰める。

そこから身体を捻つて

左足を軸に右足で後ろ回し蹴りを放つ。

ハーデスはそれを右手で防ぎシヴァの右足を掴むと、ブンブンとシヴァを振り回し上空に投げ上げた。

ハーデス（かなり上空に飛んでいましたね。）

ハーデス「！」

そんな事を考えていると、シヴァを投げ上げた方向から、何か水色の塊がこちらに飛んで来た。

それはなんと、直径1mぐらいの氷の塊だった！

ハーデス「シャドウクロー！」

ハーデスはそれを即座に粉々にした。

ハーデスは指を鳴らし自分の影を
爪の形にして氷の塊を
壊したのだった。

そしてその頃には、
シヴァは地面に着地していた。

ハーデス「ほう、能力者だったのですか、少しほどできるよひですね。」

シヴァ「少しほど動搖するとおもつたんだが、全く表情が変わらない
とはな。」

ハーデス「自惚れないで下さい、たかがあの程度の力で私をじつこ
うしようなど、百万年早いです。」

シヴァ「だつたら、これでどうだ！
アイスバレット！」

シヴァが右手をこぢらにに向けてそつまつと、
さつきの氷の塊よりも
大きいものが弾丸のよく裏いかかってきた。

ハーデス「無駄です」

ハーデスは再び指を鳴らした。だが今度はいくらなんでも数が多す
ぎる。

しかしやはりハーテスは無傷。

何故なら自分の影以外の影も使ったからだ。

そう、ここは森のなか
影など嫌といつまどある。

森の影を使い再度、

氷の塊を粉々にしたのだった。

シヴァ「くつ、まさかここまでやるとは。」

ハーテス「まだ、やりますか？」

シヴァ「当たり前だ！」

そう言つとシヴァは、
極限まで集中力を高め出した。

ハーテス（何かやるつもりですね。まあ、大体予測はつきますが。）

ハーテスは取りあえず

面白そうなので待つことにした。

そしてついにその時がきたらしい。

シヴァ「随分と余裕をかましてるじゃねえか、
この技をつかわれたら

最後、逃げ場はないんだぞ。

今ならまだ、許してやってもいいだ。」

ハーデス「全く問題ないですね、貴方[♂]」と同時に私は敗れませんよ。」

ハーデスはまた、馬鹿にしたような表情でシヴァを見下した。

シヴァ「そりかよ！だがその瘤に触る余裕があまえの敗因だ！」

そしてついに技が発動する。

シヴァ「死ね！アブソリュートゼロー。」

辺りの木々がどんどん凍つっていく。

それはハーデスも例外ではない。

そして辺り一面が銀世界になってしまった。

side シヴァ

シヴァ「ふん！魔王の側近とか言っていたが、大したことなかつたな。まあ、魔王の側近がこんな所にいるわけがないしな。嘘だつたということかな。」

ハーデス「嘘ではありませんよ、私は魔王様の忠実なる側近です。」

しかし、凍つっていたはずのハーデスの声がした。なんと、凍つっていたのはハーデスの影で本物は全く別の場所にいた。

シヴァ「馬鹿なー、どうやつてあの技から逃れた！」

シヴァはかなり動搖していた。

実はさつきの技が自分にとつての最強の技であり今までこの技から、逃れたのは自分の師ただ一人だったからだ。

それをこのハーデスという男は全くの無傷で、目の前に立っている。

自分の師です、「」の技を無傷ではかわせていなかつたといふの。」

ハーデス「簡単な事です、私は自分の影を盾にしたんですよ。そして私が死んだようにわざわざ見せたんですよ。」

つまり、俺があの技を使う瞬間に本物のハーデスは影を使い全く別の場所にいたと言つ事にか。

そして、技の効力が切れてからこちらにまた戻つてきたわけだ。

シヴァ「しかし、何故そこまでしたのに俺に攻撃しなかつた？」

ハーデス「私がそんな不意打ちをしたら、貴方は確実に死にますからね。」

シヴァ「てめえ、舐めてんのか？」

シヴァは額に青筋を立てながら言った。

ハーデスはシヴァのその様子を特に気にも止めずに話す。

ハーデス「貴方のさつきの技、アブソリュートゼロでしたか？大した技ですが私にとつては児戯に等しい。」

シヴァ「何だと？」

シヴァは自分の最高の技を、児戯に等しいなどといわれ怒り心頭だつた。

ハーデス「元々は、絶対零度と言つ言葉で
絶対零度とは、氷点下で最も低い気温
273、15度のことであり、アブソリュートゼロとはその別名で
すね。」

シヴァはまさかここまでこの男が知つてゐるとは思わなかつた。

シヴァ「だが、それがどうしたまだ俺が貴様に
負けたわけではない！」
シヴァはそういつたが、もはや只の強がりだつた。
さつきの技でかなりの
体力と精神力を消耗してゐた。

ハーデス「では、そろそろこちらから攻めますよ。」

ハーデスは話が終わるといつの間にかシヴァの
背後にいた。

シヴァ「……」

シヴァ（全く見えなかつた、いつ動いたんだ！）

シヴァは地面を蹴つて、一気にハーデスとの距離を開けた。

シヴァはあれほどハーデスに、喧嘩腰でいたのに今は全身から滝の
ような汗をかいていた。

ハーデス「どうしたのですか？先程と比べると、若干スピードに欠

けますね。」

捕まれば全てが終わる、そうおもつ程に、
このハーデスといつ男からヤバい気配を感じる。

今更だが、相手をしてはいけない者を相手にしてしまったことを理解する。

シヴァ（今はなんとかして、逃げなければ少しでも氣を抜けば殺られる！）

しかしもう、体力の限界だった。

ハーデスはもう眼前にまで迫っている。
そしてハーデスの影が、シヴァの心臓をあと少しで貫かんとしたとき、

????「そこまでだ、魔の者よ！」

女性の声が響き渡った。

ハーデス対レイア

side ハーデス

突然、森の中に女性の声が響き渡つた。

ハーデスは即座に影を元に戻した。

シヴァ「し、師匠が何故ここに！」

シヴァは目の前の女性をみて叫んだ。

その女性は金色の髪に碧い目をしており、白いフリルのワンピースを着ていた。

そしてシヴァの前まで行くと、いきなりシヴァを蹴つ飛ばした。

シヴァは数十メートル吹つ飛ばされた。

シヴァ「何をするんですか師匠！」

金髪の女性「この馬鹿弟子が、相手の実力もわからんかったのか…」

金髪の女性はシヴァに
凄い剣幕で怒鳴った。

シヴァ「怪しい奴とは思いましたが、そこまでの奴とは思わなかつたので…」

シヴァは頭を伏せながら言つた。

ハーデス「やつと出できましたね、

あのままの方を見殺しにするのかと思いましたよ。」

金髪の女性「まるで最初から私がいたのが分かっていたような口振りだな。」

金髪の女性は以外そつとしていた。

ハーデス「ええ、分かっていましたよ。まさかいきなりお弟子さんを蹴つ飛ばすとは思いませんでしたが。」

ハーテスはシヴァを見ながら言った。

金髪の女性「あれば私の弟子だからどうしようが私の勝手だよ。」

ハーテス「そうですね、実は自分の弟子さんをみて蹴りたかっただけとかそんなことは全くないんですね。」

金髪の女性「おお、よく分かっているじゃないか。その通りだよ。」

金髪の女性は楽しそうに言った。

ハーテス「冗談で言つたつもりなんですが、まさか本当にそうだと
は。」

ハーテスは少し以外そうな表情で言った。

金髪の女性「なんだい、なにか文句でもあるのかい?」

ハーテス「いえいえ、

文句などありませんよ。最近の人間は少しでも
なにかあれば体罰だなんだと言つ、脆弱な者ばかりですからね。」

金髪の女性「そうそう、そうなんだよ。私も道場で師範やってんだけど、身体を鍛えたいからって私の所に来たのに、修行についていけないから皆、何かとイチャモンつけてやめていったよ。」

ハーデス「」苦労なされているんですね。それで最後にあそこへお弟子さんが残つたんですね。」

ハーデスは金髪の女性に労りの視線送りながら言った。

金髪の女性「ああ、そうだよ。あれでも根性だけはあるからね。」

ハーデス「そうですか、しかしあまだまだですね。技を活かせていい。」

金髪の女性「そうだね、しかしあんたなら、活かせるってこいつのかい？」

ハーデス「ああ、それほどひょじょひづ？」

ハーデスは自分で活かせると言つたのに何故か疑問系だった。

金髪の女性「まあいいさ、それなら確かめるまでだよ。それから自己紹介がまだだったね、私の
名前はレイアだ。」

レイアは軽く会釈をした。

ハーデス「お弟子さんと違つて礼儀はちゃんとなつてこようですね。

ならば私も改めて、
我が名はハーデス
魔王様の忠実なる側近です。」

ハーデスはシヴァに自己紹介したときと、同じようにななめ45度の角度でお辞儀した。

レイア「じゃあ、いくよー！」

レイアはハーデスの周囲を残像が残るくらいの凄いスピードで走り出した。

ハーデス（ほう、なかなかのスピードですね。）

レイアはそこからスピードを上げる。

もはや凍っていた地面もレイアが走った後は粉々に割れ更地になっていた。

そしてハーデスの背後からレイアが襲いかかる。いつの間にかレイアの右手には槍が掴まれていた。しかも槍は光っていた。

レイア「せい！」

レイアは掛け声とともに光る槍で攻撃してきた。

ハーデスは瞬時にしゃがんで槍をかわし、レイアに左足で足払いをかける。

レイアは軽くジャンプしてそれをかわした。

ハーデス「いきますよ、9の舞円舞曲、シャドウワルツ」

ハーデスは無数の影を、レイアに向けて放った。

レイアは光りの槍を、

頭の上で両手で回転させて元に戻すと、今度は自らの身体を凄いスピード回転させて襲い来る無数の影を全て潰した。

それを見てハーデスは、拍手を送った。

ハーデス「素晴らしいですね。これほどとは思いませんでしたよ。」

レイア「お世辞はいいよハーデスと言ったかい、あんたがかなり手加減して攻撃していたのは、分かっていたからね。」

ハーデスはそれを聞いて楽しげに笑った。

ハーデス「貴方こそ、

本気でやつていなかつたですね。」

レイア「まあ、小手調べだつたからね。」

ハーデス「そうですか、では少しだけ、面白い事をしましょうか。」

レイア「何だつて？」

それを聞いてレイアは眉をしかめる。

ハーデス「フフフ、あつと氣に入つて頂けますよ。後、忠告しておきます、今のうちにお弟子さんとともに逃げておいたほうがいいですよ。」

ハーデスがその言葉を発した途端、ハーデスから禍々しい氣配が漂つた。

レイア「馬鹿弟子、逃げるよ。」

レイアは再びシヴァを
ゲシゲシと蹴る。

今まで師匠とハーデスの戦いを観ていたシヴァはボーとしていたが
蹴られた事で我にかえった。

シヴァ「で、でもコイツはびくするんですよ。コイツを倒せな」とー。

レイア「阿呆、お前は馬鹿でさうに阿呆なのか！見て分からんのか！
この男はなにかヤバい
事をする気だ！忠告通りににげるんだよー。」

シヴァ「わ、分かりました！」

レイアはシヴァとともにこの凍り漬けの大地から逃げ出した。

ハーデス「さて、そろそろやりますか。うまく逃げて下さいよ、じやないと溶けてなくなりますからねえ。 クククククク。」

ハーデスは心底楽しそうに笑っていた。

そしてハーデスは指を
パチンと鳴らし技を発動させた。

ハーデス「燃え尽きなさい！ ソーラーフレア！」

そして辺り一面全てがの大地が溶けてしまった。

人物紹介2（魔王）（前書き）

今度は魔王だけ。

人物紹介2（魔王）

魔王（本名リリア）

紅い髪に紅い目をしており、少女のよつたな顔立ちをしているが、既に600年以上生きている。

年については、タブーであり、昔に一度そこに触れた親衛隊の一人を殺しかけた事がある。それをハーデスがなんとか抑えた。

魔王リリアはハーデスの事を超がつくほど溺愛しており、自分に敵対したものには勿論容赦しないが、ハーデスにたて突いたものには、正気を失うほど痛めつけるらしい。

親衛隊はその事を知っているため、ハーデスには絶対に逆らわない。まあ、それ以前に親衛隊は魔王と同じように、

ハーデスにも忠誠を誓っているため逆らう事は、まず無い。

能力

能力についてはまだ謎である。

天使（前書き）

なかなかペースを上げて投稿というのは難しいですね。

天使

side レイア

レイアはシヴァとともになんとか森の中から抜けた。

レイアは自身の光の能力を使いシヴァを肩に担ぎ上げ逃げたのだ。

レイア「全くなんて奴だよ、あそこまでやるとは。」

レイア（私も本気じやなかつたけどあのハーデスという男、影の能力以外にも能力を持つているなんて驚きだよ。）

レイアが驚くのも無理はない、なにせ基本的に能力とは一人につき一つなのだ。

それなのにハーデスという男は全く違う能力を最後に見せた。

レイア（これは、他にも能力を持つていると考えた方がいいね。）

シヴァ「あ、あの師匠そろそろ下ろして欲しいんですけど。」

レイア「あ、忘れてたよ。」

レイアはシヴァをポイッと地面に投げ捨てた。

シヴァ「ちょい歸丘！俺の扱いが雑過ぎますー。」

シヴァは自分の師に吠えた。

レイア「気にするな。」

レイアは一言それだけ言った。

シヴァ「気にします！

メチャクチャ「気にしますーもつ少しテリケートに投げて下さー。」

レイア「ひるむやこね。

お前は恋する乙女がつーの。」

レイアは弟子を一瞥すると、はあーとするとため息をついた。

レイア「しかし、ハーデスの目的がなんなのか分らないね。魔王

の側近が何故あんな所にいたのか。」

レイアはウーンと唸る。

シヴァ「師匠、考へてもわからないですよ。それより、道場に一度戻りましょ。」

レイア「それもそうだな。」

そして二人は道場へと歩きだそうとした瞬間だつた、レイアとシヴァの背筋に悪寒が走る。

レイア・シヴァ「……」

レイアとシヴァは何者かが上空にいるのを発見した。

そこには一枚の翼を纏い金色の剣と盾をもち、茶色の髪を肩まで伸ばした黒い瞳の赤いマントを羽織つた者がいた。

？？？「私は四大天使の一人ミカエルと申す、貴殿らには悪いが死んでもらつ。」

シヴァ「師匠！なんですかコイツは…」

レイア「あたしが知るかい！急に現れて死ねつていつてんだから間違いなくない敵だろけどね！」

レイア（コイツは一体何者なんだい！さつき会ったハーデスとは、別種のヤバさを感じるよ。）

レイアは全神経を集中させていた。

そうでもしないと意識を持つていかれそうだったからだ。

レイアはシヴァの方を見て大丈夫か確認した。

シヴァは凄い形相で上空にいる者をにらんでいた。

レイア（まあ、ああでもしないとあの馬鹿弟子も気を保つていられないんだろう。）

ミカエル「では、死んでもらおいつ。」

ミカエルはそう言つと、剣に炎を宿らせてこちらに突進してきた。

レイアは光りの槍を形成し、シヴァは氷の剣を作った。

そしてミカエルは目の前までくると剣で突き刺さんとレイアに目に止まらぬ連撃を放つた。

レイアはその攻撃をなんとか凌いでいた。

その間にシヴァが横合いから氷の剣でミカエルを狙う。

ミカエル「貴殿では、相手にならん。」

ミカエルはシヴァにそつと自身の翼で、シヴァを吹っ飛ばした。

シヴァ「つっ！」

シヴァは飛ばされながらも地面になんとか、手をついて衝撃を緩和した。

ミカエル「貴殿も氣付いておるんだろう、炎と氷では相性が悪い。そちらに氷点下の限界はあるが」「ちらは炎だ、何千、何万とある。つまり氷など一瞬で溶けてしまつ。」

シヴァは顔をしかめていた。

ミカエルはさらに言つ。

ミカエル「さらに運の悪い事に、我と戦っているこの者の能力は光、つまりお主は全力を出せない。」

レイア（くつ、まさかそこまでバレているとは。コイツの言う事は最もで光りは絶対零度の原子の運動が停止に近い状態だとスピードが極限にまで遅くなる。そうなると、私の光の能力も役に立たない。）

レイアは自分一人でもなんとか凌いで馬鹿弟子だけでもこの場から逃がしてやろうと思った。

シヴァ「師匠！ 師匠が何を考えているか分かりますよ！ でも俺は逃げません！ 絶対に！」

レイア（ああもう一馬鹿弟子の事だから、絶対こう言つと思つたよ！）

レイアは頭を抱える。

その時だった。

ミカエルの影がミカエルを貫こうとしていた。

ミカエル「！－！」

ミカエルは上空に飛び
影をかわした。

そしてレイアの影から姿を現したのはなんとハーデスだった。

本性（前書き）

最近、寝不足です。
なかなか自分の時間が作れないです。

本性

side ハーデス

ハーデス「なにか不穏な気配がすると思つて、来て見ればまた貴方達ですか。」

ハーデスはやれやれといった表情だった。

シヴァ「それはこっちの台詞だ！」

レイア「それよりあそこにいるアイツはなんなんだい？大天使ミカエルとかいってたけど。」

レイアはハーデスに問い合わせた。

ハーデス「天使ですか？確かにあの姿は天使ですね。しかもミカエルといえば天使の中でも最も、最強に近い存在ですね。」

ハーデスは上空を見上げながら言った。

ミカエル「おしゃべりなはそこまでだ。貴殿は、人間ではないな？ならば貴殿に用はない。」

ミカエルは再びレイアに攻撃しようと剣を構えた。

ハーデス「やらせませんよ、この方達は私の獲物なんでねえ。」

ミカエル「邪魔をするというのか、貴殿は魔族であろう何故、人間に味方する？」

ミカエルは心底不思議そうな表情で言った。

ハーデス「味方をしているわけではありませんよ。先程も申しましたようにこの方達は私の獲物です。それを横取りするというなら容赦しませんよ。」

ミカエル「ふむ、ならば先に貴殿から潰すとするか、貴殿の名はなんと申す？名を名乗らずに死ぬのはあまりに不憫だからな。」

ハーデス「私の名前はハーデス、魔王様の忠実なる側近です。」

もはや恒例となってきた自己紹介だった

ミカエル「ほう、魔王の側近と申すか、楽しめそうだな。ではいくぞ！」

ミカエルは上空から翼を広げて急降下してきた。

ハーデスはミカエルがこちらに来る前にいきなり自分の影の中に隠された。

ミカエル「むーーじにいつた？」

その時ミカエルの影が少しづつ動いた。なんと影はミカエル自身の影を残して、ミカエルの周囲に何体も同じ影が地面から出てきた。

そしてどこからかハーデスの声が聞こえた。

ハーデス「さあ、踊りなさい！幻影乱舞！」

ミカエルの周囲に出てきた、ミカエルの影達は同時にミカエルに襲いかかつた。

ミカエル「小賢しい技をつかいよつて。消え去れ！焦恢陣！（じょうかいじん）」

ミカエルは剣を地面に突きたて、自身の周りに炎の円を作った。

ミカエルを攻撃しようとしていた影は全て燃え尽きてしまった。

影を燃やされてしまったハーデスはシヴァの影からでてきた。

シヴァ「心臓に悪い現れ方をするな！」

ハーデス「やはり、あの程度の技では、傷一つつけられませんね。」

ハーデスはシヴァを無視してつぶやいた。

ハーデス「仕方ありませんね、あれを出しますか。」

ハーデスは自分の影に手を突っ込むとなんと、そこから槍を取り出した。

ハーデス「出でよ、ロンギヌスの槍。」

影からでてきたのは、真っ白な装飾の橢円形の槍だった。

ミカエルはそれを見て驚く。

ミカエル「何故貴殿が、それを持つている…」

ハーデス「さあ、何ででしょうね。」

ミカエル「それは厳重に天界で管理されていたはず。」

ハーデス「さあ、何故何でしょ？」

ハーデスはニヤニヤしながら言った。

ミカエル「まさか、貴殿…？」

ハーデス「貴方が考へてゐる通りだと思いますよ。」

ミカエル「貴殿は重罪を犯したのだぞ！」

ミカエルは信じられないと言つた感じだつた。

ハーデス「関係ありませんねえ。」

ハーデスはキッパリと言つた。

ミカエル「何だと？」

ミカエルはそれを聞き訝しげな顔をした。

ハーデス「天使どもは、全員始末する予定なんですよ、だから関係ないと言つたんです。」

ミカエル「貴殿は一体何を考えている。我らが天使を始末出来ると、思つておるのか。」

ハーデス「ええ、できますねえ。この槍で貴方を始末した後に他の天使も見つけ次第抹殺しましょつか。クククククク
ア～ハハハハハ！」

ハーデスは狂つたように笑い出した。

そしてあまりにも禍々しい殺氣を放っていた。

レイアとシヴァは身体中から悪寒が走っていた。

ミカエルでさえも少し気圧されていた。

ハーデス「あゝあ、やっぱこの喋り方かつたりいわ。クソ天使てめえは今から俺にボロ雑巾のよういやられるんだから、覚悟しつけよ。」

レイアとシヴァはハーデスのあまりの変貌ぶりに啞然としていた。

そしてハーデスはついにその本性を現し、その牙を天使に向かた。

実力

s i d e ミカエル

この男は一体何なんだ。急に雰囲気が変わったが・・・ミカエルはハーデスの変貌を不思議にみていた。

ハーデス「さて、やるか。」

ハーデス「「縮弛」」

ハーデスはミカエルの前から消えたかと思うと、いつの間にかミカエルの横から槍を突き出していた。

ミカエル「――」

ミカエルはなんとか剣のさきで弾いた。

ハーデスは弾かれた槍を元に戻し、そこからまた槍を突き出した。

ハーデス「貫け、ロンギヌス。」

なんと、槍はミカエルに向かつて槍自体が伸びていた。
しかも異常な程のスピードで。

ロンギヌスの槍は変幻自在に動きまわり、ミカエルを翻弄する。

ハーデスはそこからさらに追撃する。自身の影を使って。

ハーデス「9の舞、シャドウワルツ。」

ハーデス「さあ、今度こそ踊り狂え。」

ミカエルは剣でロンギヌスの槍を弾いていたが、ハーデスの影に捕まってしまった。

そしてついにロンギヌスの槍がミカエル腕を貫いた。

ミカエル「ぐつ」

ミカエルの腕からは、血が滴り落ちていた。

ミカエル「やつてくれるな。」

ハーデス「ククク、だから言つただろう、てめえはボロ雑巾のよつにやられるとな。」

ミカエル「調子に乗るでない。」

ミカエルはそつまつと、自身の剣をさらに燃やし血のよつに真つ赤な装飾になつていた。

ハーデス「その剣は確かにレーヴァテインとかいうやつだな。」

ミカエル「ふむ、やはりこの剣の名前も知つておつたか、確かにこの剣はレーヴァテインだ。炎を司る我に相応しいとおもわんか？」

ミカエルは誇らしげに言つた。

ハーデス「なんとも思わねえな。」

ミカエル「ならば、今から分からせてやるやー。」

ミカエルは、身体が弾かれたよつな勢いでハーデスに接近した。

ミカエルはハーデスに右足のハイキックをきました。
ハーデスは頭だけ、後ろに引きかわしたが、さらにミカエルは身体を回転させ、左足で足払いをかける。

ハーデスは右足でミカエルの左足を踏んづけた。

ハーデス「させねえよ！」

だがそれこそがミカエルの狙いだった。

ミカエル「ふつ、」の至近距離で我が剣術をかわせるかな。
」

ミカエル「さあ、今度は貴殿が踊る番だ！」

ミカエル「超炎撃！」

ミカエルの剣のまわりには炎が渦のように舞っていた。
そしてハーデスはその攻撃をもろに受ける。

ハーデス「かはつ！」

ハーデスは身体をくの字にさせたのけぞっていた。

ミカエルはそのまま剣をハーデスに突きまくった。

ミカエル「さあ、これで最後だ！」

ミカエルはハーデスの心臓を躊躇う事なく貫いた。

ハーデス「つつ！」

ハーデスは血飛沫をあげ膝から崩れ落ちた。

ミカエル（これで邪魔者は消えた、後はあの二人だけ。）

レイアとシヴァは信じられない表情でハーデスを見ていた。

一度しか戦っていないが、ハーデスの強さは本物だった。それがこんな簡単にやられるとは思っていなかった。

だからこそ、違和感を感じた。あまりにも呆気なさすぎる。おかし

いと。

ハーデスは地面に倒れている。いや、倒れていたハズだった。

しかし地面に倒れていたハーデスはなんと影だった。

ミカエル「なんだと！確かに手応えはあつた！
これも影だと言つのか！」

ミカエルは目を限界まで見開いていた。

ハーデス「あ～あ、手加減してやつてるつてのに、このクソ天使は
ムキになりやがつてよお。」

ミカエル「我を相手に手加減だと、やはり頭がイッテしまったのか
？」

ハーデス「ククク、ある意味そうかもなあ。」

ハーデスは嘲笑っていた。

ハーデス「俺はよお、まだ全力の30%も出してないんだよ。」

ミカエル「嘘が下手だなそんな手には乗らんぞ。」

ミカエル（ふんー）ちらの動搖を誘つつもりだろうが、そうはいかん。）

ハーデス「だつたら試して見るか？」

ハーデスはミカエルを挑発した。

ミカエル「やつてみる！」

ハーデス「そうかいそうかい、では遠慮なく。」

ハーデスはミカエルを攻撃するはずなのに、槍を影の中に戻した。

ミカエル（何故、槍を戻す？あの槍は唯一我らに対抗できる代物のはず）

ミカエルは思考に没頭していた。
しかしそれが間違いだった。

ミカエルの右腕はいつの間にか肘から先が無かつた。

ミカエル「ぐあああ！」

ハーデスはミカエルの右腕を手頭で切断したのだ。

ミカエル（ば、馬鹿な！我が視認出来なかつただと、いくら考え方をしても、我であれば少しでも攻撃の気配があれば分かるはず。一体何故？）

ハーデス「不思議そうだな、ならば教えてやろう、なに簡単な事だ単純に実力の差だ。」

ミカエル「実力の差だと？舐めた事を言つおつて！」

ミカエルは憤慨していた。

ハーデス「そうか、まだ分からぬのか、お前つて頭悪いのな。」

ミカエル「何だと！」

ハーデス「お前、めんどくさいわ。さつさと死ねよ、クズが」

ハーデスはまたミカエルの前から消えた。
そしてハーデスがミカエルの背後に立った頃にはミカエルの両足と左腕が無くなっていた。

ミカエル「ぐアアアアア！」

ハーデスは最後にミカエルの頭を踏んづけた。

ハーデス「どうだ、分かったか？これが俺とお前の実力の差だ。」

ミカエルは生まれて初めて恐怖を感じていた。
これほど危険な存在がいたとは夢にも思わなかつた。

ミカエル（これ程の実力がありながら、魔王の側近だと言つのか？
ならば魔王とはどれほどなのかな想像すらできない。）

ミカエルは静かに目を閉じていた。

ハーデス「どうやら覚悟は出来たようだな。じゃあ死ね！」

ミカエルは来たるべき、時に備えた。

だが・・・

ハーデス「つまらん、ハッキリ言つて殺す氣すら失せた。」

ミカエル「何?」

ハーデス「お前、さつさと失せろ。邪魔だ。どうせ腕も足も再生するんだろ?が。」

ハーデスは本当につまらなさそりに言った。

ミカエル「何故、見逃す?」

ハーデス「興が失せた。」

ハーデスは一言それだけ言った。

ミカエル「まあ、いいだろう。だがいつか後悔するぞ、我を倒すチャンスを逃すのだからな。」

ハーデス「それは絶対に無いな。それから警告しておく、魔王様に会つたら逃げる事だな。」

ミカエル「何故だ？」

ミカエルはそれを聞いて不思議そうだった。

ハーデス「俺からお前に仕掛けたが、魔王様は自分の敵は勿論容赦しないが、俺に敵対する者には魔王様は地獄の苦しみを与える。つまりお前は魔王様の敵にもなった訳だ。」

ミカエル「ならば、しばらくなは」の身を隠しておこう。」

ハーデスの話が本当ならかなりマズイとミカエルは思った。

ハーデス「それが賢明だな。」

ミカエル「では、私はそろそろ消えるとするか。」

ミカエルの右腕と両足はもう再生していた。

ハーデス「流石は大天使と言つたところか。」

ハーデスはミカエルの腕と足を見て言つた。

ミカエル「では、さらばだ。」

ミカエルは翼をはためかせて、飛んで行つた。

四四（前書き）

最近、忙しくて。なかなか執筆できません。

目的

side レイア

レイア「何故、ハーデスがここにいる？お前は、私達を始末しようとしたじゃないか、ならば私達を助ける必要は無かつたはず。」

天使が去った後にレイアはハーデスに質問した。

ハーデス「確かに、そなんですけどねえ。私には私の目的があると言つ事ですよ。」

ハーデスの喋り方はいつの間にか元に戻っていた。

シヴァ「まあ、助かったのは事実だからな一応、礼を言つておく。ありがと。」

ハーデス「フフフ、貴方も礼儀はちゃんとなっているじゃないですか。」

そういう人は好きですよ。」

ハーデスは笑顔で言った。

シヴァ「ば、馬鹿言うな！男に言われても嬉しくねえよ！」

シヴァの顔を真っ赤だった。

レイア「で、ハーデスの本当の目的はなんなんだい？」

ハーデス「私は魔王様に人間界の様子がおかしいと言われて、調査に来たのですよ。」

レイア（人間界の様子がおかしい？でも、確かに天使がでてくるなんておかしいね。しかも私達を殺そうとした。）

ハーデス「天使は本来、人間を守護する存在。それが逆に人間に害なす存在になつていきましたね。なにか関係があるかも知れません。」

レイア「ハーデスは、天使を始末するのが目的かい？」

レイアはハーデスが天使と戦っている時に天使は全員始末すると、言つていたのを思い出した。

ハーデス「まあ、それも私の一つの目的ですね。他にもありますか。

「

レイア「そういえば、今更だけど魔王の側近が魔王のもとから離れて大丈夫なのかい？」

レイアの疑問は最もだつた。なにせ一番近くで魔王を守つていなくてはならない、側近がないのだから。

ハーデス「ええ、全く問題ありませんよ、親衛隊の方達が私の変わりにいますから。」

レイア「そうなのかい、所で今から道場にいくんだけど、ハーデスも来ないかい？」

ハーデス「うーん、そうですね、そちらによつていいくのもいいですね。」

ハーデスは少し考えたが行く事にした。

レイア「そつかいそつかい！じゃあ早速行こつか。」

何故かレイアはハーデスの手を恋人繋ぎで握つてきた。

シヴァ「ちよつと師匠いこんですか！ハーテスは敵ですか...」

レイア「助けてもらつたら恩を返す、その言葉をシヴァは忘れたのかい？」

レイアはいつも馬鹿弟子と喧嘩しているが、ついこの時は、ちやんと答前をいつのだつた。

シヴァ「すみませんでした。ちつですね、助けてもらつたら敵も味方も関係ないです。」

シヴァは納得しながら言った。

レイア「ちうだよ、馬鹿弟子も分かってましたじゃないか。」

そしてレイアはいつものように馬鹿弟子と喧嘩。

シヴァ「という訳だ、ハーテスお前の携帯の番号とメアドを教えてくれ！」

レイア（いや、何故そこまで携帯番号とメアドの交換になつてゐるんだ

い？）

しかもハーデスも普通に対応していた。

レイア「ハーデス、私の番号とメアドも教えるよ。なにかあつたら連絡してちょうだい。」

ハーデス「ええ、分かりました。」

レイア「と、言つても今からは、一緒に行動するからね。」

レイアはまだハーデスの手をつないでいた。といふか離す気配がない。

シヴァ「ハーデス、一日に一回は俺にメールしろよー。」

レイア「だから、お前は恋する乙女かつつーのー。」

レイアはシヴァをゲシゲシと蹴りながら言った。

シヴァ「い、いこじやないですか。メールぐらい…」

シヴァの態度は出会い前と比べると180度変わっていた。

レイア（全く、この馬鹿弟子ときたら、一度懐いた相手にはとことん懐くからねえ。）

ハーテス「まあ、それくらいにしておいてやるやうに行きましょうか。

」

レイア「やうだね、じゃあ馬鹿弟子いくよー。」

シヴァ「はいー。」

そして3人は目的地へと向かつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2954m/>

シルバーコード

2010年10月14日18時58分発行